

保全生態学入門 ―遺伝子から景観まで 鷲谷いづみ・矢原徹一 著，文一総合出版，1996年，272頁，3090円

ここ数年来，生物多様性の保全に対する関心が高まってきたが，専門家によるまとまった形での情報がなかったため，言葉だけが一人歩きし，肝心の保全に対するコンセンサスが得られにくい状況にあった。本書はこのような現状に強い危機感を持った二人の生態学者によって書かれたもので，「生物多様性とは何か？ なぜ守らなければならないか？ どうすれば守れるのか？」といった基本的な疑問に答えてくれる本である。現場での経験に基づくと思われるその使命感は本書を読めばビンビン伝わってくる。これぞ入魂の一冊と言えるだろう。本書は「適応進化と生物間相互作用」というキーワードを軸に，生物多様性の進化的・生態的根拠を種のレベルにとどまらず，遺伝子から景観まで幅広い視点から解説している。見やすい図表や小記事が多いため，大変理解しやすい。さらに，保全に関する現状分析や実践的提言を行うことで保全生態学が実用的な学問であることのアピールも忘れていない。また最新の研究成果に基づく記述が多く，引用文献や他の参考書の紹介も記載されているため，この本をきっかけにさらに専門的に学ぶことも可能であろう。とても親切な本である。

内容の大きな特徴としては，熱帯雨林や尾瀬などの原生的な自然よりもむしろ農耕地や人里といった身近な二次的自然に重きを置いている点が挙げられる。私たちの身の回りでも生息域の分断化や帰化植物の侵入などによって多くの生物が絶滅の危機に瀕しているらしい。そしてそれらの自然の多様性を保全するためには草刈りや野焼きといった適切な人為干渉・管理も必要であると言う。この考えは自然度のみを重視する従来の「自然保護」とは相反するものだが，二次的自然の成立過程を考えれば当然の結論であろう。これからの人間と自然の関係に

ついて深く考えさせられた部分である。「生物多様性」という言葉を一度でも発したことのある人は表紙のかわいい（裏表紙はもっとかわいい）この本を読む義務があるだろう。本来，自然がいかにか「多様」であるかわかるはずである。

（東大・広域システム・生物・黒田啓行）

生物科学ニュース 1996年8月号 (No.296) P.68